

大坂に向かった。ナナと旭莊夫妻と孝之助、婢、謙吉の門人八十一が同行した。この時の船旅の仔細は旭莊が淡窓・久兵衛にあてた書簡に詳しい。

これによれば一行を乗せた船は、下関を發して、門司の田野浦―豊後竹田津―周防の上関を経由している。ここまでで四日の行程であった。ここで国東半島の豊後竹田津に寄港しているのは驚きだが、瀬戸内の潮目や風向きによるのであろう。周防の上関からは二昼夜かけて一気に大坂に向かうが、途中、明石沖を通るとき暴風雨にあつてゐる。

旭莊は、その後の上方でのナナの行状も仔細書簡で報告している。ナナは旭莊・マツ夫妻と旭莊の門人矢上行助や小林安石らの献身的な世話を受けながら、大坂周辺はもちろん堺・京都に足を運んだ。その内容もきわめて興味深いものであるがここではおく。この時のナナの大坂滞在は実に三ヶ月に及んだ。そして天保十年（一八三九）八月二十四日に帰郷した。このときのことを淡窓はこう記している。

八月二十四日。妻、浪華ヨリ帰レリ。前日、ソノ久シキヲ經テ帰ラサルヲ以テ、人ニ托シテ筵ヲ設ケシニ、遊觀スル所アリテ、久シキニ及ブナリ。疾病厄難アルニ非スト云ヒシカ。果シテ然リ。予、久兵衛、伊織ト共ニ山田原ニ至ツテ之ヲ迎フ。其ノ他、親戚郷人往ク者五六十人ニ及ヘリ。彼ノ処ニテ行厨ヲ開ク。暮ニ近ウシテ、妻歸リ来レリ。近藤文紀、伊達貫什、皆浪華ヨリ其邦ニ歸ルニヨツテ從イキタレリ。家ニ歸ツテ筵ヲ設ク。饗ニ預カルモノ三十余人ナリ。妻浪華ニテ謙吉カ家ニ留マリ、堺ニ遊シテハ小林安石ヲ主トシ、京ニテハ矢上行助ヲ主トス。媳婦、幸之助、皆安健ナル由ナリ。

予想を超える長期の旅に、妻の安否を心配した淡窓は人に托して「筵（はか）」、つまり占いをしてもらったところ、要するに「遊觀スル所アリテ、久シキニ及ブナリ。疾病厄難アルニ非スト」という答えを得たという。

こうして遙か大坂から帰つて来る妻ナナの一行を淡窓は山田原に迎えたのである。迎えに出たのは淡窓、久兵衛、伊織に加えて、親戚・郷人五六十人。ナナは夕刻になつて無事着いたが、歓迎の面々はその到着を待

たずして行厨、つまり弁当を開いている。一同はここから帰宅したが、家でも再び「筵」を敷いて宴席が設けられた。

大坂からの長い旅の終わり。山田原からは豆田の廣瀬家まで二キロ余り、あと三〇分も歩けば家に着く所である。そういう場所であるにもかかわらず、何故、これほどの大人数で迎えに出向くのか。淡窓はここにはその意味を書いていないが、これがいわゆる「坂迎え」にあたるものであるのは確かだろう。

坂迎え（さかむかえ）とは、遠方へ旅した者が帰還するにあたり、その無事を喜び、村境まで出迎えて共同飲食をもつて祝う儀礼をさす。坂は境、そして酒に通じる言葉である。古来、村々には村境と意識されている場所があつた。それは必ずしも行政上の区分ではなく、いわば伝統的な生活空間の中で位置づけられていた。

坂迎えの風習は、江戸時代では特に伊勢講などで盛んに行われた。そこではハバキヌギとかドウブルイとよばれる酒宴を催した。そこで講員に御札を分配し土産話に花を咲かせるのである。共同飲食は体力の回復ということだけでなく、非日常の生活から日常の生活へ戻るための一種の通過儀礼的な要素をもつていた。

坂迎えは、遠く古代において国司の交代のときにも行われた。新任の国司が任国の国境に入るとき、国府の役人が出迎えてもてなした儀式である。

古代の坂迎えについて考えるとき、興味深い遺跡がある。大肥吉竹遺跡（日田市大鶴町）である。ここでは奈良〜平安時代の集落跡から、儀式などに用いられた朱墨土器や、当時の「硯」である円面硯の破片などが出土している。この遺跡は大肥川流域の沖積地の最奥部に位置しており、すぐ近くにある峠を越えれば、北は宝珠山、小石原を越えて田川郡に通じる道である。またここから西にむかえば福岡県の杷木に出る。してみれば、大宰府から赴任する新任の国司を迎えるには格好の場所と言えるところである。この遺跡を単なる律令時代の官衙のひとつとするのではなく、こうした境界儀礼のとかかわりで考えたい所以である。